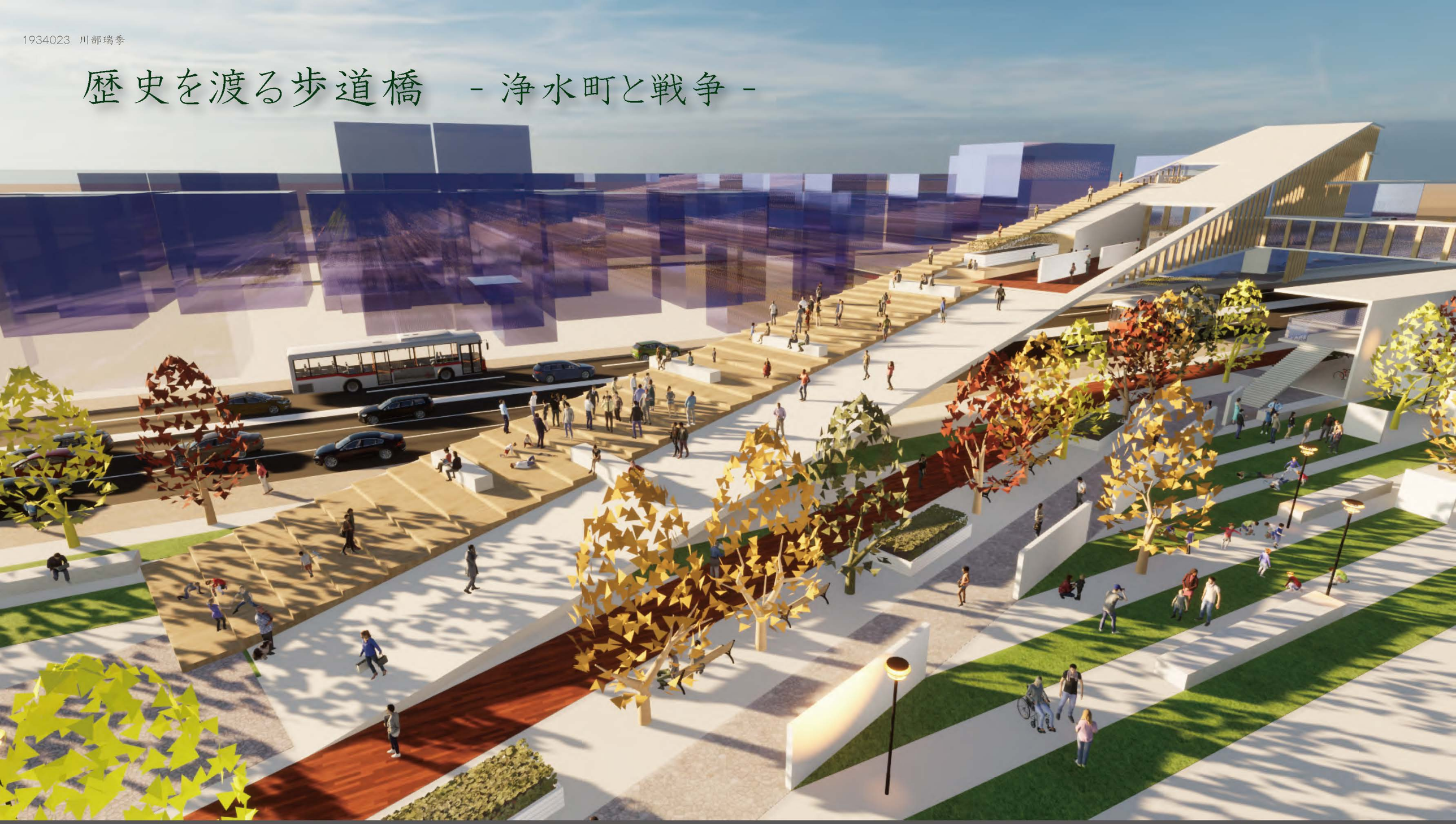
1934023 川部瑞季

歴史を渡る歩道橋 －浄水町と戦争－



背景： 愛知県と戦禍の記録

第二次世界大戦時、名古屋市は、北部（東、北西区）と南部（熱田、南、港の各区）に工業地帯、中央（中、栄西区）に商業繁華街があり、その中間や周辺地域には密集した住宅街があった。そのなかに、中小工場が散在しており、人口密度は高く住居のほとんどが木造であった。そして、敢命的ともいえる防空上の弱点を持っていた。1942 年 4 月 18 日、アメリカ軍の爆撃機により東京や神戸などの都市とともに名古屋に対する空襲が日本で初めて行われ、1944 年 6 月には、新たに開発された大型の爆撃機である B29 が日本本土に空襲するようになった。名古屋は工業都市で特に航空機産業の中心地であったため、12 月の三菱の航空機工場への空襲を皮切りに、以後繰り返し爆撃目標の対象となった。また、当初、アメリカ軍の空襲の目的は軍需工場であったが、次第に市街地を標的とする空襲も行われる。

1945 年 3 月からは、一度に出撃できる B29 の機数が増加し大規模な空襲ができるようになったことや、夜でも飛ぶことのできる戦闘機が日本に少ないことから、アメリカ軍は目標と戦術を切り替え、大都市を夜間に低空から空襲することにした。

その最初が 3 月 10 日の東京大空襲であり、その二日後、名古屋の市街地も空襲された。これが名古屋大空襲である。太平洋戦争の間、アメリカ軍は B25 による初空襲を含め、名古屋に 63 回の空襲を行った。B29 の来襲は 2,579 機に達し、投下弾は判明分のみで 14,500 トンを超える。結果、名古屋都市圏のうちが焦土、民間人死傷者は 41,150 人であった。これは、全国で 5 番目の多さである。

空襲被害死者数(人)

1	広島県	142,430	17	和歌山県	1,733	33	島根県	647
2	東京都	107,021	18	新潟県	1,558	34	宮崎県	565
3	長崎県	71,695	19	徳島県	1,472	35	埼玉県	467
4	大阪府	13,123	20	千葉県	1,425	36	大分県	400
5	兵庫県	11,107	21	香川県	1,409	37	沖縄県	371
6	愛知県	10,139	22	北海道	1,283	38	佐賀県	187
7	静岡県	6,337	23	群馬県	1,216	39	京都府	132
8	神奈川県	5,824	24	岐阜県	1,216	40	鳥取県	106
9	鹿児島県	4,609	25	宮城県	1,212	41	秋田県	103
10	福岡県	4,374	26	愛媛県	1,207	42	滋賀県	43
11	三重県	3,066	27	山梨県	1,174	43	長野県	40
12	富山県	2,809	28	岩手県	1,070	44	山形県	37
13	山口県	2,279	29	熊本県	939	45	奈良県	36
14	茨城県	2,214	30	青森県	865	46	島根県	33
15	福井県	1,929	31	栃木県	673	47	石川県	27
16	岡山県	1,772	32	福島県	649		全国	419,068

（防災情報ポータルサイト）

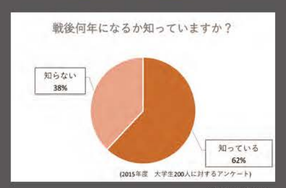
問題： 戦争遺跡への認知度と意識調査

愛知県は戦争により、甚大な被害を被った。しかし、被害の大きさに対して、戦禍の痕跡は意外と少ない。（例：広島原爆ドーム、長崎原爆資料館など）また、戦争遺跡への認知度も低い。

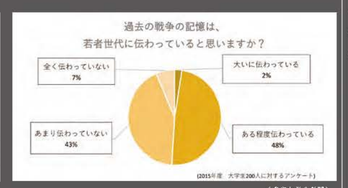
名古屋大空襲についてのアンケート調査では、資料館等の施設の展示・企画から歴史を知る機会は少ないことが分かる。（左図参照）

戦争終結から今年で 78 年。2015 年に実施された戦争の記憶に関する学生 200 人への意識調査（下図参照）では、「戦争は年々忘れられていく」という問いに対して約 8 割の学生が「思わない」と回答した。また、「過去の戦争の記憶は、若者世代に伝わっていると思うか」という問いに対しても、程度の差はあるものの約 7 割が「伝わっていない」と回答している。

（名古屋市令和元年度第2回市政アンケート）



（東海大学生新聞）



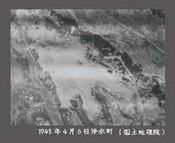
（東海大学生新聞）

〈浄水町の歴史〉

伊藤産業株式会社はかつて愛知県豊田市にあった旧軍施設である。

1939（昭和 14）年、愛知航空機株式会社の試験飛行場として約 1km の滑走路 1 本を備え開設した。1941（昭和 16）年に霞ヶ浦航空隊の分遣隊が移転、1942（昭和 17）年には名古屋海軍航空隊として独立。滑走路は 2 本に増設された。

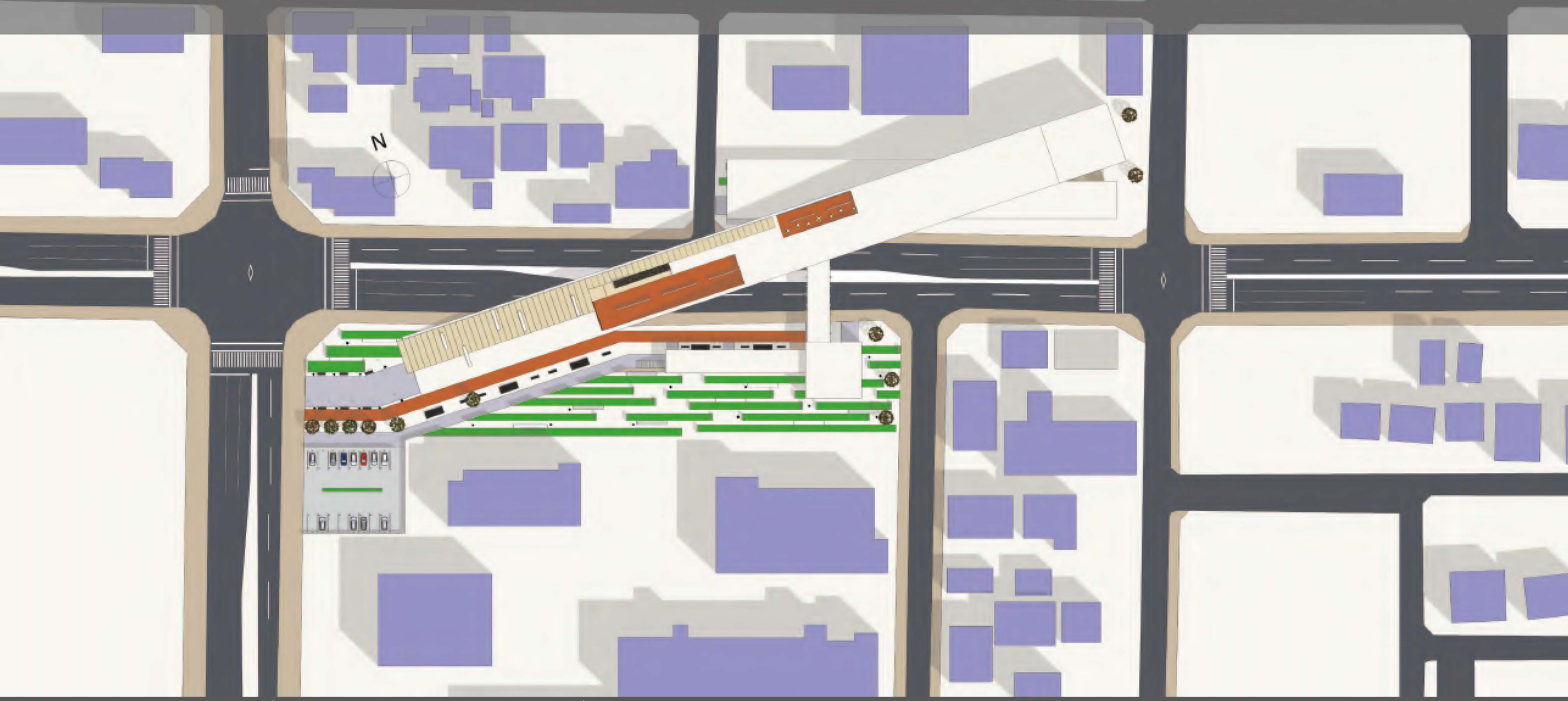
ここから神風特別攻撃隊菊隊が沖縄の米軍艦隊へ特攻を行い、62 名が亡くなっている。現在は慰霊碑となっており、愛知少年院の南側には慰霊碑が建てられている。浄水町神社境内の交差点から東に進む道は当時滑走路である。付近の竹藪の中には地下戦闘指揮所壕跡が残る。通信壕と言われている。



1945 年 6 月 6 日浄水町（国土地理院）

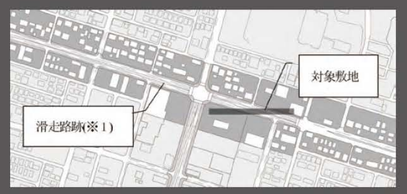
コンセプト ： 歩道橋型の平和祈念資料館

戦争について歴史を風化させないこと、それは、この浄水町でかつて戦争があったということを知ることから始まる と考えた。日常生活のなかで人間に無理なく、自然、考える、そんなきっかけを与えるような場所を提案する。そのため設計では、歴史を展示するだけの施設ではなく、人々の生活に溶け込み、日常的に通勤・通学で利用される歩道橋と平和祈念資料館の複合施設を計画する。よって、敷地は通勤・通学での人の行き帰りが多い場所や交通量の多い場所を選定する。歩道は高齢者が二階へ行けるように、あるいは二階から平屋に繋がる。そこから、派生して歴史に対する興味を引き出すような平和学習、教育的な機能を目標とした



01. 対象敷地

対象敷地：愛知県豊田市浄水町（旧伊保原飛行場跡地名古屋海軍航空隊）
人口（2015 年）：11440 人
世帯数（2015 年）：5042 世帯
面積：3.99 平方キロメートル
人口密度：3757 人／平方キロメートル



02. 敷地概要

地域特徴：

浄水地域は、豊田市中心部から北へ約5キロメートルの台地に位置し、浄水駅を中心に市街地や住宅地が形成され、その周辺は、農地、里山、河川、ため池、緑地、雑木林などの自然が多く残されており、都市と自然が共存している。当地域の成り立ちは、戦前・戦後にかけての開拓により人々が徐々に入植し、農耕地が広がった。昭和40年代後半の団地造成や平成5年からの区画整理事業などにより急速に住宅地が広がった。豊田市有数の住宅地となり、人口も増加し続けている。平成28年度には、浄水中学校の開校に伴い梅坪台地区が分離し、市内で28番目の地区として誕生した。

03. 敷地調査：時間ごとの人の居場所と交通量

調査期間：計2日（9時、14時、21時）
調査項目：・時間ごとの人の流れ
　　・交通量

午前9時：駅やロータリーのバス停に人が多い。（学生・サラリーマン）
午後14時：スーパーマーケットや駅前の広場、病院周辺に人が多く集まっている。（高齢者・親子）
午後21時：駅前や駅から住宅地に向かう人が多い。（学生・サラリーマン）

↓

・自転車に乗っている学生が多い。（付近に小学校・高校が位置しているため）
・朝と夕方から夜にかけた時間は、学生やサラリーマンが多い。

↓

・浄水駅を中心にたくさん行き来ができている。
・時間帯問わず、人通りは多く賑わっている。

一日目

二日目

平面計画

1 階：

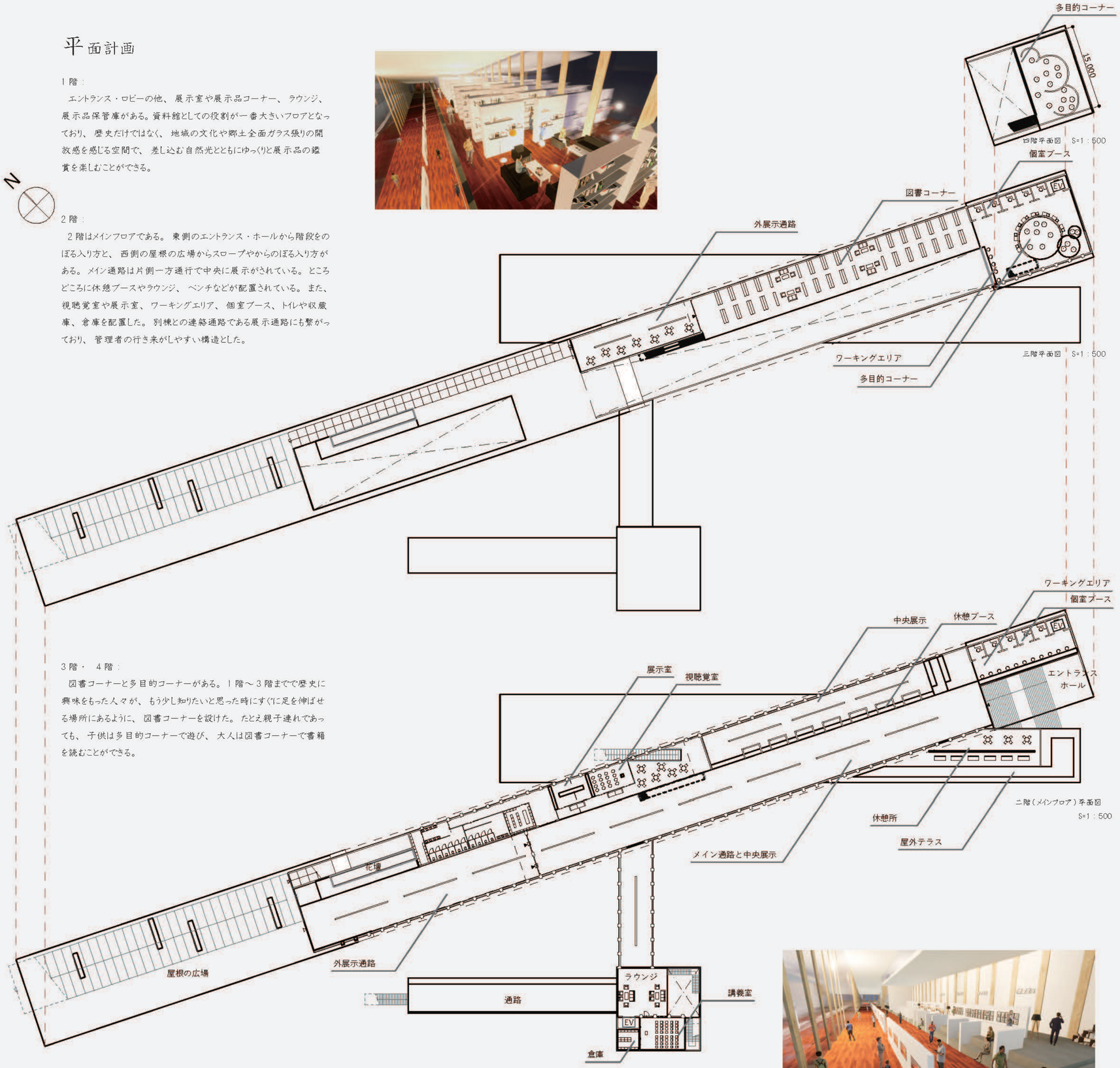
エントランス・ロビーの他、展示室や展示品コーナー、ラウンジ、展示品保管庫がある。資料館としての役割が一番大きいフロアとなっており、歴史だけではなく、地域の文化や郷土全面ガラス張りの開放感を感じる空間で、差し込む自然光とともにゆっくりと展示品の鑑賞を楽しむことができる。

2 階：

2 階はメインフロアである。東側のエントランス・ホールから階段をのぼる入り方と、西側の屋根の広場からスロープやからのぼる入り方がある。メイン通路は片側一方通行で中央に展示がされている。ところどころに休憩ブースやラウンジ、ベンチなどが配置されている。また、視聴覚室や展示室、ワーキングエリア、個室ブース、トイレや収蔵庫、倉庫を配置した。別棟との連絡通路である展示通路にも繋がっており、管理者の行き来がしやすい構造とした。

3 階・ 4 階：

図書コーナーと多目的コーナーがある。1 階～ 3 階までで歴史に興味をもった人々が、もう少し知りたいと思った時にすぐに足を伸ばせる場所にあるように、図書コーナーを設けた。たとえ親子連れであっても、子供は多目的コーナーで遊び、大人は図書コーナーで書籍を読むことができる。



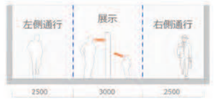
展示方法

展示品の大半が通路の中央に一直線上に並べられている。理由は、この施設の主な利用者が、浄水町の住展示品を目的として見に来た人のための施設ではなく、通勤・通学で地域住民が毎日利用する建物だからこそ、通行のしやすさを優先し、一直線上に展示がされている。展示をただ通り過ぎる日々のなかで、ふとした瞬間に展示に興味をもつことを期待する。

閲覧方法

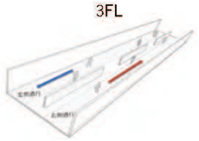
メイン通路と中央展示は、歩行者と展示品の閲覧者が混在する場所となる。そのため、館内を歩くにあたっては基本的に片側一方通行とした。通路の両端 2.5 メートルは歩行者専用の通路で、展示がされている中央 3 メートルは閲覧専用スペースである。閲覧したいと思った時に閲覧スペースによける事で、いつでもゆっくりと立ち止まって閲覧することができる。

RFL



＜中央の展示閲覧空間と左右の歩行者専用通路＞

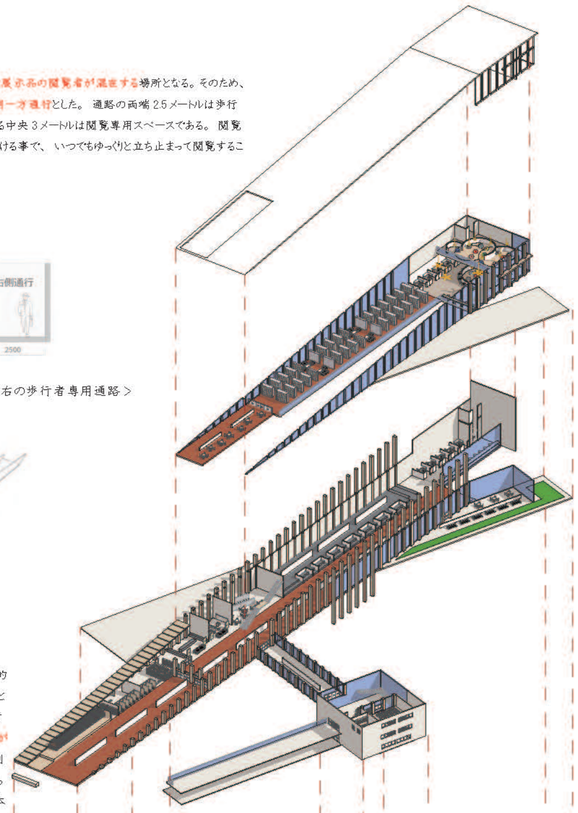
3FL

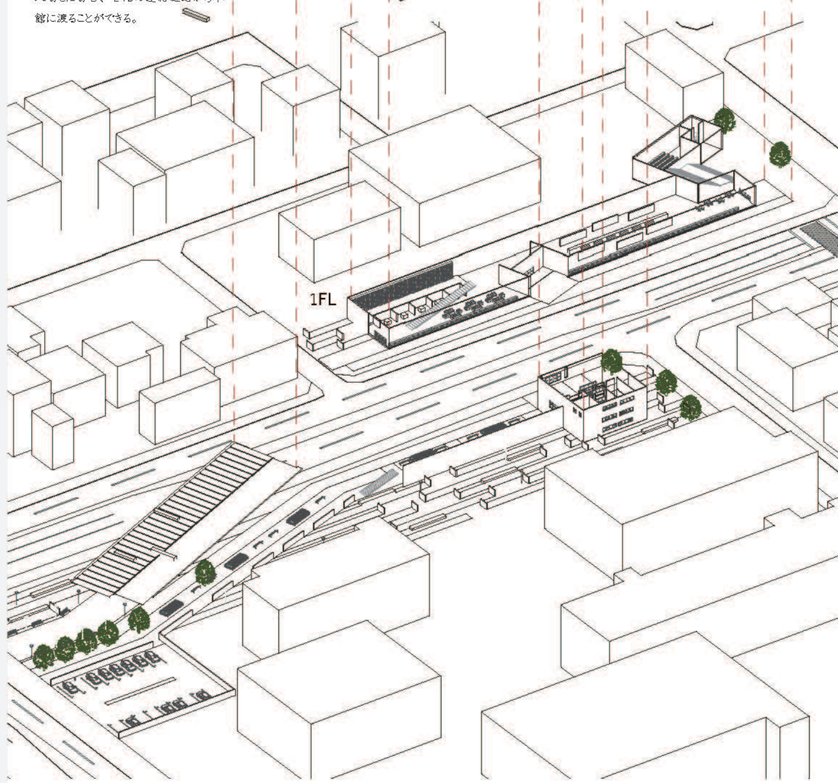


2FL

エントランス

エントランスは全部で6つある。基本的にはメインフロアである 2FL へとつづく東と西のエントランスが利用されるが、歩行者がどの場所にいても建物への出入りがスムーズに行われるように本館 1 階や別棟などに多く設置されている。別館から入場した場合、2 階の連絡通路から本館に渡ることができる。



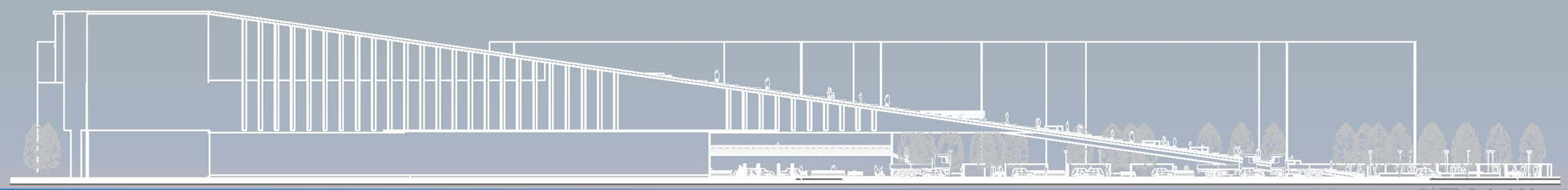


ICAD 教育版

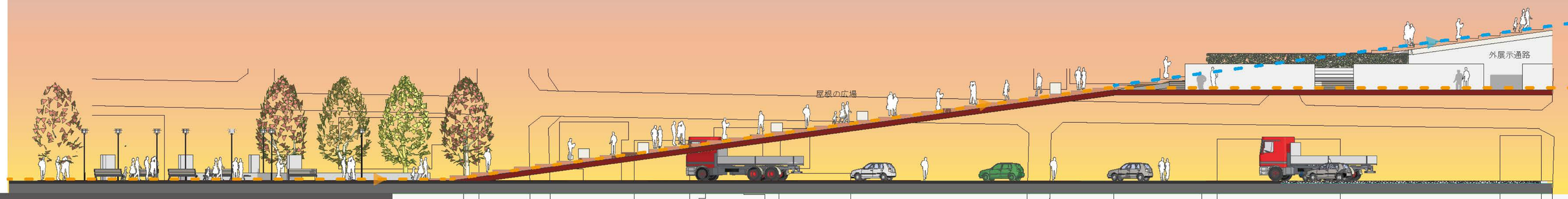
平安断面図　S=1:500

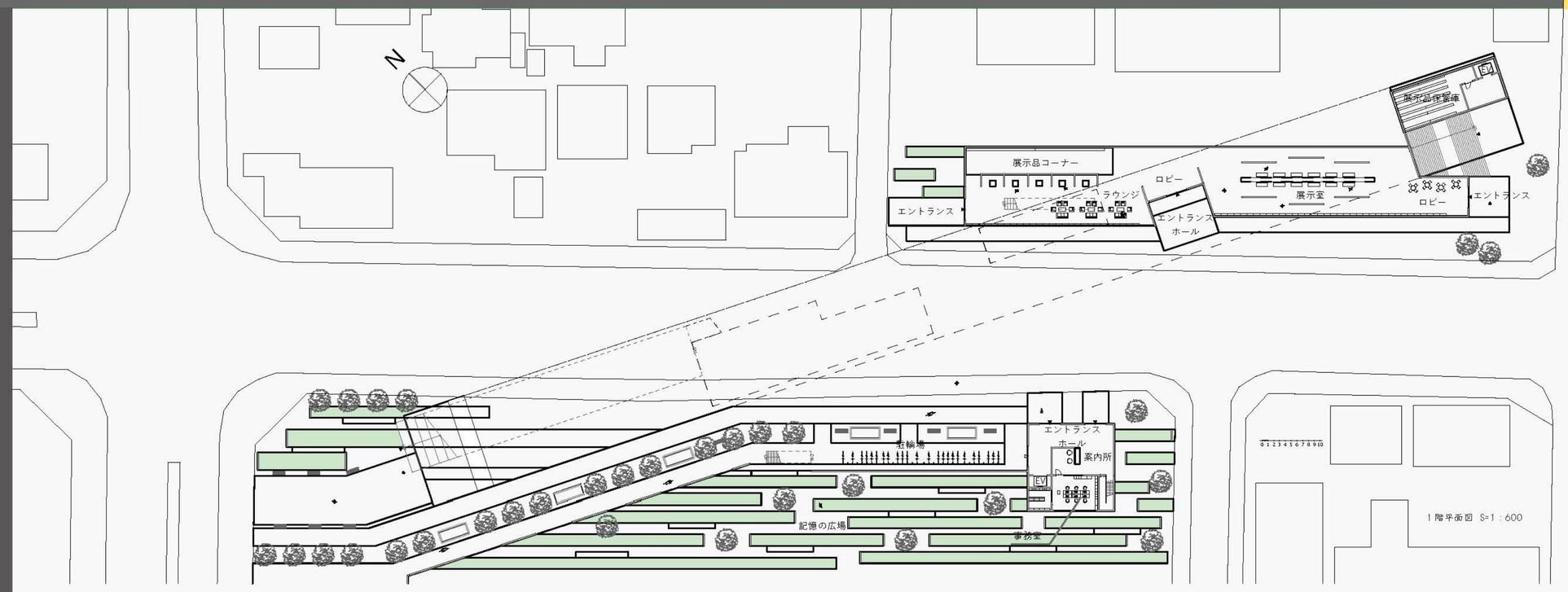
別棟断面図　S=1:500

ARCHICA

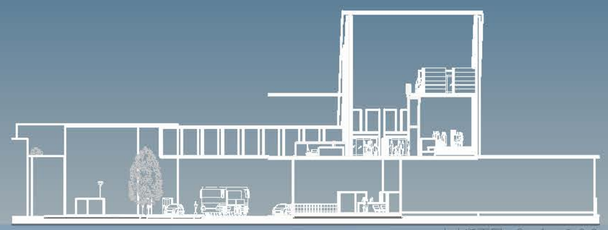


北立面図　S=1:500





1階平面図　S=1:600



中央断面図 S=1:500

西側断面図 S=1:500

この建築は地域住民が日常的に利用してこそ、意味のあるものとなる。この建築を通じて地域の人々が町の歴史を知り、改めて、各々が戦争について考えるきかっけが生まれることを期待する。

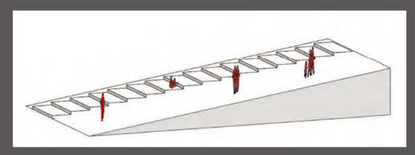
教育版

断面図 S=1:200

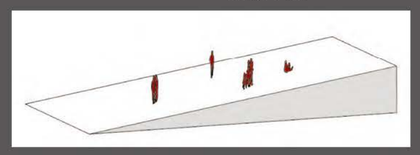
- 屋根の広場

意匠面では[illegible]を想起させるような、[illegible]が特徴だ。屋根は西南から東北にかけて地面からスロープになっており、道路の上を斜めに横切っていく。ゆるやかな階段が並行して敷かれており、景色を見ながらスロープを上る、階段に座って本を読む、寝転がって日向ぼっこする、など自由に過ごせる憩いの広場として計画した。この広場は[illegible]として、人々でにぎわい、町の憩いを意味した広場となる。

建物に入る。



建物の上を通る。



建物の上を通る・集まる。

- 屋根のダイアグラム

スロープにすることで建物のなかに入り、横切っていくというより、広場の延長線上の建物の上を通り過ぎていく、という感覚に近くし、より日常的に使いやすい建物を目指した。

- 東側の別棟

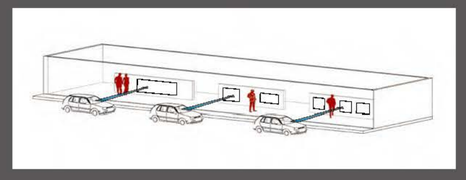
本館の他に東側に別棟が設置されている。ここは、主に施設の[illegible]するため、[illegible]（案内所）や[illegible]がある。また、[illegible]があり、近隣の小学校や高校から生徒を呼び、課外学習や研究発表や会議など、多岐に渡る用途で利用される。

西側立面図 S=1:300

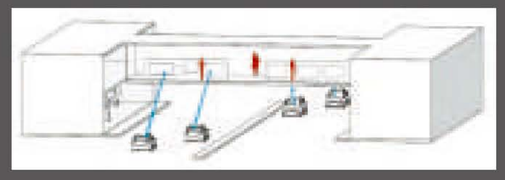
- 車と展示空間の関係性

歩道橋という特徴を活かし、建物の下を通る自動車からの視点にも着目した。1階は、道路と平行してガラス張りの展示空間が続く。運転手は過ぎ去る景色のなかで、ガラス越しに展示品とその展示を見る人々を認識する。その時生じる、何をみているのか、という疑問が建物への興味、そして展示への関心へと変化する。

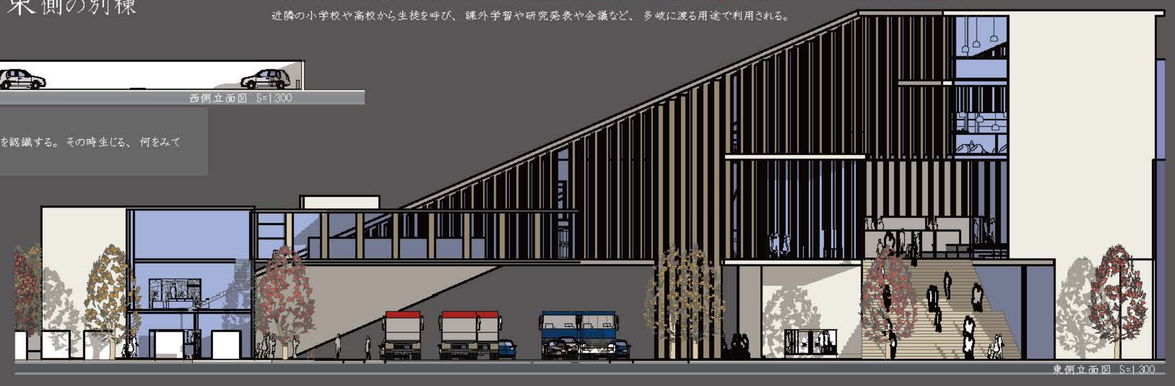
ダイアグラム



車と平行する展示空間



展示空間の下を走る車



東側立面図 S=1:300